

第 22 回日韓学生フォーラム

平成 18 年度最終報告書

文責：第 22 回実行委員 多田真理子

1. 研究・活動の目的

私たち日韓学生フォーラムは学生による、学生のための、日本と韓国間の国際交流団体です。未来を担っていく世代としての学生が、2 週間、寝食をともにし、皆でフォーラムを作り上げていくその過程の中で、語り合い、ともにぶつかりあいながら、個人レベルでの親交を深めていきます。そして、日本と韓国間にまだ存在する壁をしっかりと見つめ、まっすぐに自分の国と相手の国を見つめた上で、私たちが築きあげていくべき日韓の未来とはなんであるのか、を一人一人が自分自身に問いかける機会となります。顔と顔を向かい合わせ、直接意見を言い合う中で得られたお互いへの理解や友情は、とても強いものだと思います。そして、こうした市民レベルでの私たちの小さなつながりのひとつひとつが、やがては国と国とを真に結びつける大きな力になっていく、と私たちは考えています。

地理的に最も近くに位置し、古来文化・政治面で密接なつながりを持ってきた国、韓国。現在も成長を続けるその姿は、東アジアにおいて大きな存在感を持つに至っています。

確かに日本と韓国の人的交流は毎年増え続けていますが、それは双方の親近感の醸成には必ずしも結びついておらず、これら両者のもつ素顔は誤解や偏見という仮面にかくされているように思われます。日韓の将来のために、わだかまりのない対等かつ友好的な関係を築くには、誤解や偏見を指摘し合い、同時にそれらを生み出す温床を探り出していくことが不可欠だと思われます。

私ども日韓学生フォーラムは 1986 年春から学生による手作りの自由で率直な意見交換の場として、非政治・非宗教・非営利を前提に過去 21 回の「日韓学生フォーラム」を開催してきました。当フォーラムでは、分科会やシンポジウムなど会議形式の討論をプログラムの中心に据えて誤解の源を見出し、互いの客観的な認識を深めつつ、未来に向けた視野の広い話し合いを目指しています。

私どもは不幸な歴史を持つ日韓関係において、両国間に横たわる隔たりを埋める作業を行った上での親善交流こそが真の日韓関係につながると思います。

またフォーラム期間中、通訳を介さない参加者同士の直接的な対話を重視し、共通言語として英語を使用しております。それは、互いに母国語ではないという不自由さはありませんが、参加者が自ら対話を持つとする積極的な態度が必要であると考えます。

さらに日韓学生フォーラムでは討論のみならずフィールドトリップ・ホームステイ・文化紹介なども企画されております。分科会などで取り上げられた議題に関係の深い場所へ足を運ぶフィールドトリップにより、私どもの討論はより充実したものとなるのです。加えてホームステイや文化紹介では各国の生活や文化を直接肌で感じる事が出来、その国

の社会への理解をより深めることができます。約 2 週間のプログラムを通して、参加者は文字通り寝食を共にし、共通の体験を分かち合うのです。私どもは日韓学生フォーラムの活動と継続が日韓の学生間に、ひいては両国の民間レベルにおける親近感を生み出す一助になればと切に願っております。

以下は、第 22 回のテーマ文「*The Bridge for Brand-New Tomorrow*」になります。

日韓国交正常化 40 周年を迎えた昨年 2005 年は、「日韓友情年 2005」とされ、日韓の交流がますます盛んに行われた年でした。これまでの 2002 年のワールドカップ共同開催、2004 年からの韓流ブームを受け、韓国への旅行者、韓国語の学習者の数は数年前より格段に増えており、韓国のドラマ・映画は今や日本社会に自然と浸透しつつあるよう感じます。

しかしまた一方で、こうした交流とは対照的に、日韓両国の間に存在する未だ解決の糸口の見えない問題も顕在化しています。

現在、私どもが「自明のもの」と考えていることは、果たして両国共通の認識なのでしょうか。これは歴史認識から現在につながる問題全般に渡って、私どもが問い直さなければならぬことです。今後も、日本と韓国が真のパートナーとして、多方面での協力を目指すのであれば、市民レベルで地道な話し合いを通し、共通認識を増やし、認識誤差を知るという作業を続けていくことが大切であると考えます。

第 22 回は韓国開催です。そこで、私どもは韓国という地において、改めて過去から今を見つめることを通し、未来の姿を模索していくという目標を掲げました。それが今期のテーマでもある「*The Bridge for Brand-New Tomorrow*」です。

これらの目標を実現するためのステップとして、まず韓国に住んでいる戦争体験者をはじめとした当事者との対話を行います。当事者の生の声を聞くこと、また実際に現地へ赴き、そこでそれぞれの立場からの意見交換をすることによって、問題の現実性と重要性をより強く実感できるはずです。フォーラムの中のみではなく、外部の人との接触により、新たな視点や自らの認識への問い直しもできることでしょう。

また、日韓両国が抱える問題のみではなく、韓国という国を知り付き合っていくために、北朝鮮を含めた朝鮮半島も視野に入れて勉強していくことが大切だと考えます。そのために、朝鮮半島を視野に入れたディスカッションや、それを垣間見られるような場所へ赴くことも予定しています。

上記のようなテーマを基盤に行われる活動を通して、参加者各人が視野を広げ、自己認識を新たなものとし、それを社会に発信していく役割を担っていきたいと考えています。そして、私どもの草の根活動が日韓友好の架け橋～*The Bridge*～のひとつとなることを確信しております。

2. 研究・活動の内容と方法

私たちは、学生による学生のみで構成される学生団体です。資金集めからプランの作成、事務作業まで全て学生のみで行っています。一人一人のメンバーはそれぞれ、総務や財務、学術や渉外といった役目を持って自分の仕事をこなします。誰かに与えられた場に参加する、というのではなく、自分たちで作上げた場所と機会と時間を使って、最大限にそれを活かし充実したものにする、ということが私たちは重要だと思っており、私たち団体の特徴だと感じています。

活動の基盤を作り、メンバー集めから行っていくのが、前年のフォーラムを経験し引き続いて活動を行う実行委員のメンバーです。第22回は、実行委員長・馬場壮也、渉外広報・渡部睦美、財務・多田真理子の三名です。10月頃からテーマを決め、韓国側の実行委員と連絡を取り、大きな概要をつくっていきます。11月頃からメンバーを募集開始、選考会を経て今年は、実行委員合わせて19名のメンバーが集まりました。12月の発足合宿を経て、1月から本格的な活動開始となります。日韓学生フォーラムは東京（関東）・関西・九州の三地域にまたがる団体であり、メンバーはこの3地域に分かれて、ふだんの勉強会などの活動は行っています。また、ここからは、基本的に実行委員と他メンバーとの間に違いはありません。前年の経験から団体を引っ張っていくのは実行委員が中心となりますが、テーマの深堀や見つめなおしから、企画の立ち上げ、それらの進行、全てメンバー一丸となって、一人一人が役割を果たしながら、活動を進めていきます。

東京、関西、九州のそれぞれの地域で毎週一回の勉強会を行っています。そして発足合宿含め計3回の全国合同合宿、学生団体「日韓学生会議」との合同によるシンポジウムの開催など、精力的に活動してきました。2週間のメイン・フォーラムのみだけでなく、こうした活動が日韓学生フォーラムのメンバーにとっての大事な要素を占めています。

日韓の学生同士による、自由で率直な議論、そして交流—それを実現するのが、夏8月の2週間にわたって開催される、フォーラムです。第22回は韓国での開催となりました。メイン・フォーラムと呼ばれるこの2週間は、文字通り、私たち日韓学生フォーラムの「メイン」となるわけですが、しかしその2週間を作り上げるための準備として、このようにおよそ10ヶ月間の本国での活動があるのです。

3. 研究・活動の実施経過

2週間に渡るメイン・フォーラムの実施概要は以下の通りです。

8/5		19:30日本メンバー仁川空港到着 オリエンテーション（自己紹介等）	
8/6	F T 1 : Modern & Colonial Chosun		オープニング・セレモニー
8/7	分科会 1	分科会 2	スポーツ大会 1
8/8	F T 2 : DMZ		シンポジウム 1 : 北朝鮮
8/9	分科会 3	文化紹介練習	JAPAN NIGHT
8/10	分科会 4	文化紹介練習	KOREA NIGHT
8/11	前半総括	ホームステイ（各地のメンバー宅へ）	
8/12	ホームステイ		
8/13	ホームステイ先からソウルへ		キムチ作り体験
8/14	分科会 5 (オープンセミナー)	分科会 6	
8/15	分科会 7	F T 3 : ナヌムの家訪問	
8/16	F T 4 : 水曜集会	F T 5 : 西大門刑務所	シンポジウム 2 : 従軍慰安婦
8/17	分科会 8	シンポジウム 3 : 日中韓シンポジウム	
8/18	後半総括	スポーツ大会 2 (漢江にてボート乗り体験)	クロージング・セレモニー
8/19	荷造り	日本メンバー帰国	

基本的には、目的の主旨にもなっている、「学生同士の率直な議論と意見交換」を目的とした「分科会」と「FT」(フィールド・トリップ)の2つがプログラムの要となっています。「分科会」とは、政治・経済・文化・歴史・現代社会の5つの分科にメンバーが興味のあるテーマに従って別れ、そしてそれぞれの少数グループで、メンバーはひとりずつプレゼンテーションし、議論を行います。

また、メンバー同士の交流の場、親交を深める機会として、「ホームステイ」や「Japan Night」「Korean Night」と呼ばれる文化交流、スポーツ大会などのイベントも重要な企画です。「Japan Night」「Korean Night」はそれぞれの国が自分たちの国を紹介するような伝統芸能や、またメンバーが得意とするものを披露したりします。第22回においては、日本側はソーラン節や和太鼓、韓国側は伝統芸能であるサムルノリやタルチュムと呼ばれるものを披露しました。

ホームステイでは、ソウルやプサンなど韓国全土にある韓国メンバーの実家を訪れ、そこで2泊3日を過ごします。メンバー以外の韓国の人々と接する経験はとても印象深いものです。手料理を振舞われたり、観光名所を案内されたり、皆手厚く歓迎してくれることに感動します。ひとつの例として、日本メンバーのホームステイに関するエッセイを以下に載せます。

初日、ソウル組は各自ホームステイ先にスーツケースを置き、ホームステイ家族と面会を済ませると、弘大(ホンデ)に集合した。ホンデ地区のすぐ側に弘益大学という、韓国でもっとも評価の高い芸術系大学があり、現在はその学生を中心として急速に発展し、韓国の若者文化を象徴する街となっている。週末にはフリーマーケットが行われ、街中には洋服店、クラブ、カラオケなどが数多くあり、若者を飽きさせない充実ぶりである。ここで私たちはまず、様々なゲームができる店に入った。そこでグループに分かれ、カードゲームやおもちゃを使ったゲームなどをするので交流をはかった。次にノレバンへ行った。ノレバンとは日本で言うカラオケである。日本の曲を韓国人が歌ったり、反対に韓国の曲を日本人が歌ったりして盛り上がった。こうしてソウル組は解散した。

初日の夜、家族がそろったときに日本からのお土産を渡した。私はホームステイ先のパートナーに浴衣をプレゼントしたので、着付けを教え、私も浴衣を着て、2人で写真を撮ったり、家族写真を撮ったりした。浴衣のプレゼントは大変喜ばれ、韓国人の女の子であれば、1度は着てみたいと思っているようである。

2日目、この日私たちは仁寺洞(インサドン)というところに行った。ここは現代的な雰囲気と昔ながらの伝統が調和したような空間を持ち、画廊や伝統工芸店、伝統飲食店、カフェなどが密集している街である。観光客はここに来れば必ず韓国らしいお土産を買うことができる。ここで私たちは家族や友達のお土産を買い、パッピンスという韓国の有名な夏のデザートを食べるために喫茶店に入った。パッピンスは、かき氷の上に小豆やフルーツ、お餅、アイスクリームなどが乗っているのもで、韓国の夏には欠かせないデザート

となっている。このあと私たちは再び前日に訪れたホンデに向かい、そこで洋服のショッピングをした。というのも、ホンデは東京の下北沢のように古着屋さんが多く並んでいるエリアがあり、値段も安く、特に女性には便利なショッピングエリアである。そしてその後バスでチムチルバンに行った。チムチルバンとは日本の健康ランドのようなところで、中には温度別にサウナがいくつもあり、銭湯も備えられている。韓国には、ゆっくり湯船につかるという習慣がないので、湯船につかりたい場合は、ここのような銭湯を利用することになる。サウナに入った後、銭湯に移動し、垢すりを経験し、夜遅くに自宅に戻り、2日目は終了した。

そして最終日は、主にホームステイ先の家族と団欒の時間を送った。お互いの家族のことや日韓のことを話し、そしてこれからも連絡を取り続けることを約束した。

ホームステイ中は韓国の家庭料理を楽しませてもらうことができたし、1つの韓国の家族の様子を垣間見ることができたのもいい経験であった。ご両親との会話も貴重な時間であったし、想像以上に収穫が多かった。2泊3日というのも、とても適度な長さである。勉強の中の息抜きにも最適であったし、とても価値あるプログラムの1つであった。

(松野 みゆき)

4. 研究・活動の成果

第22回の日韓学生フォーラムでは、「The Bridge For Brand-new Tomorrow」のテーマのもと、日韓の未来の姿を私たちに模索していこう、という目的で活動しました。その上で意識したのは、外部との関わりを多くすることです。学生による、学生の団体という枠組みで活動していると、どうしても学生同士の交流のみに終わってしまうところがあります。もちろん、それが活動の第一目的ではあるのですが、真剣に議論をしたい、お互いの国を理解し合いたいと考えた時に、それでは足りない部分がでてくるのではないかと、思いました。様々な視野・視点を持ち、色々な角度から、日韓の間にある問題を考えたい。そのような考えから出された企画が、シンポジウム1：北朝鮮シンポジウムやFT3：ナヌムの家訪問、FT4：水曜集会、そしてシンポジウム3：日中韓シンポジウムです。

北朝鮮シンポジウムでは、日本と韓国間の問題を考える上で外せない、もっとも重要な「北朝鮮」について、メンバー間で議論を行いました。「北朝鮮」という第三者を通して日本と韓国について考えることは、改めて現代の国際情勢や外交の複雑性を感じさせられました。このシンポジウムはDMZ（非武装地帯）への訪問の直後に行いました。1953年の朝鮮軍事休戦協定により定められた軍事境界線の両側2kmの範囲が、このDMZと呼ばれる地帯なのですが、この目で北朝鮮を遥かに目にし、武器を持った兵隊が警備するこの空間の異様な気配を見てきたことは、メディアなどを通じてしか見てこなかった北朝鮮という国、北朝鮮と韓国がいまだ休戦状態にあること、を実感させられました。

FT3：ナヌムの家訪問、FT4：水曜集会では、かつて従軍慰安婦だったハルモニ（＝韓国語でおばあさん、の意）たちの話を聞き、その姿を迫りました。当時の様子を鮮明に私たちに語りきかせてくれたハルモニの話は私たちに大きな衝撃を与えました。話の最後に、穏やかな声で「あなたたちは友好関係を築いて平和な世界を作りなさい」と私たちに投げかけた言葉は、戦争とはなにか、「謝罪」とはなにか、私たちが作り上げていくべき未来とはなにか、について切に考えさせる力を持っていました。そして被害者の方々から直接話を聞ける最後の世代としての私たちの義務、被害者の身に起こった悲劇やそして彼らの平和への希望を、後世へ伝えていく責任を感じました。

シンポジウム3の日中韓シンポジウムでは、中国からの留学生をゲストとして迎え、「北朝鮮の核問題」を主なテーマとして議論を行いました。日韓学生フォーラムとして、第三者の立場の学生、特に韓国に留学にきている中国人の留学生という立場の学生と意見を交わすことはおそらくこれまでにない試みで、とても有意義な場となったと思います。日本メンバーの中には、「自分の持っている中国学生に対するイメージがいかにかステレオタイプの的であったかということを変更して実感させられた」といった意見もきかれました。また、「中国の現在の急速な発展に伴う政治的な思惑と外交政策の方針について、直接意見を聞くことができたことも大きな収穫」といった声もあり、やはり日韓のメンバー間のみの交流だけではなく、こうして外へ外へと活動を広げていくことが、これから先特に重要になってくるのだろうと強く感じました。

以上は、第 22 回において特に力を入れた一部のプログラムです。もちろん、これらのみではなく、私たちの活動は準備の一年間も含め、とても実りある活動を行ってきたと思っています。

メンバーの活動に対しての振り返った感想に共通していえることは、両国メンバーの純粋な思い、意見を討論し、そこにある違いを感じることによって、お互いをより知り、実りある討論ができた、ということです。2 週間という期間は長いようで短い時間ですが、24 時間、寝食を共にする中で、言葉の壁や文化の壁、歴史の壁などを乗り越えて、真の絆というか交流が作り上げられていくのを日に日に肌で感じ、ふと大きな感動に包まれた経験は、メンバー一人一人が感じていたといいます。また、東アジアという視点からということで、様々な立場からの視点で物を捉える事ができたことは、これから先、社会に出ていく私たちにとって、とても大切な力を養うことができた大きな機会であったともいえると思います。少人数での分科会やホームステイを通じて、お互いのことを更に深く知り、意見の交換をし、時にはぶつかりあいながらも、本当の気持ちをぶつけあった 35 人の 2 週間。

今はたとえ小さなものであったとしても、こうした活動を通して、人と人との交流、顔と顔を向かい合わせての意見の交換が、日本と韓国、東アジアの未来を作っていく上で大きな意味を成していくはずである、それが私たちの活動の根底にある考えです。

5. 今後の課題

日韓学生フォーラムは、私たちの代で22回目、年月にして20年という歴史を持った学生団体です。しかし、その存在はなかなか多くの人に知られていません。日本と韓国という両国間の関係は、20年前とは大きく変化し、そして韓国という国を私たちがもっと知り、その関係を考えることはますます意味を持っていくと思います。そのような中で、私たちのような小さな、しかし確かな生身の交流を持つ学生団体が社会に対してできることというのは本気でもっとあるのではないかと。それが、反省会においてメンバーから強い主張として出た意見です。

実際に私たちが何ができるのか、それはもっと考えていく必要があるでしょう。そして、その前に、私たち団体の存在を社会に対してもっとアピールし、活動を社会に対して発信していきたい。私たちが2週間のフォーラムで得た、あらゆる韓国の人々の生身の声や姿、向こうの同年代の学生とともに過ごして見えてきたお互いの国に対する気持ちを、日本のもっと多くの人たちにも伝えていきたい。それが私たちの望みであり、課題です。メディアへの露出を試みることも第21回から行っています。しかし、知名度が低い現在ではなかなか取り上げてもらうことも難しいのが現状です。また、私たちの活動をどのようにして発信していくか、現在は報告書と報告会という形をとっていますが、それも伝えられる範囲としては限られてきます。もっと広く、私たちの活動を世に伝えたい。そのためにも、もっと充実した「日韓学生フォーラム」を作り上げていきたい。第23回、24回と続いていくこの活動を、より高めていくために、現役メンバー・OB力を合わせて、知恵を絞って考えていきたいと思います。